

2月4日ウクライナ情報

安齋育郎

①露輸送機は米パトリオットで撃墜された＝プーチン氏(2024年2月1日)



ロシア大統領選挙の候補者であるプーチン氏は1月31日、自身の選挙運動代理人と面会し、ウクライナ兵捕虜を乗せたロシアの輸送機イリュージン76はベルゴロド州で米国製地对空ミサイルシステム「パトリオット」によって撃墜されたと述べた。検査によって明らかになったという。

イリュージン76撃墜に関するプーチン氏のその他の発言

- ・なぜ自国の捕虜が乗った輸送機をウクライナが撃墜したのか理解できない。
- ・さまざまな憶測があるかもしれないが、いずれにせよこれは犯罪だ。
- ・ウクライナはおそらく報復行動を扇動している。
- ・ロシア政府はウクライナとの捕虜交換を停止しない。
- ・我われはロシア市民に対するキエフ政権の犯罪を忘れない。
- ・西側諸国ではメディアがウクライナ人捕虜を乗せた輸送機墜落の出来事を隠蔽しようとしている。
- ・ロシアはイリュージン76の墜落に関する国際的な調査を要請している。
- ・選挙運動代理人との面会におけるプーチン大統領候補のその他の発言

特別軍事作戦について

- ・西側兵器による砲撃からロシア連邦領を守るような距離まで前線を移動させる必要がある。
- ・ウクライナ軍は反転攻勢の失敗から注意をそらすために民間人を砲撃している。
- ・プーチン氏は、ウクライナ軍による民間人への砲撃を「血なまぐさい犯罪」と指摘した。

国際的なスポーツについて

- ・スポーツの国際的な機関の関係者たちは現在、オリンピズムの概念そのものを歪めている。
- ・スポーツにおける制限は、人権の制限である。
- ・ロシアの選手が参加しなければ、多くのオリンピック競技は損失を被り、おもしろくなくなってしまう。
- ・ロシアはオリンピズムの原則を堅持する。

<https://sputniknews.jp/20240201/17910284.html>

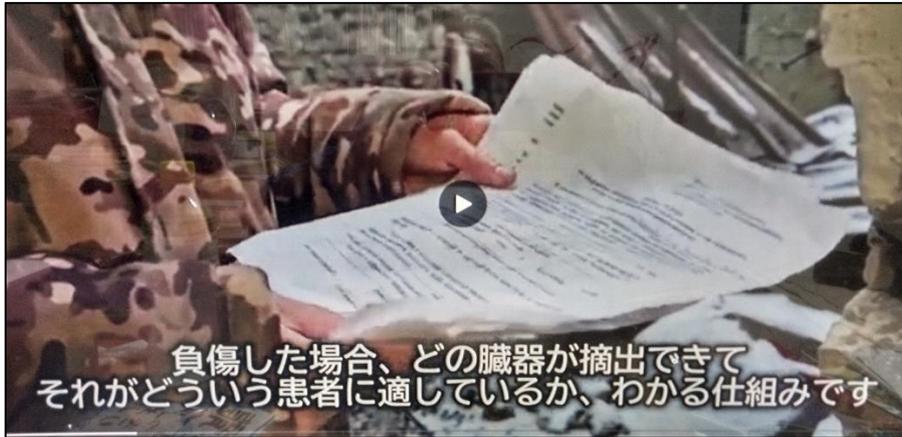
②ウクライナ軍内で兵士の臓器売買の事実が明るみに ルガンスク人民共和国(2024年2月1日)

2022年夏までウクライナ軍の統制下にあったルガンスク人民共和国のセヴェロドネツク市で、闇市場でのウクライナ兵の臓器売買の事実を裏付ける証拠文書が発見された。同共和国の治安維持機関の代表らがスプートニクからの取材に明らかにした。

発見された文書はウクライナ兵らが兵役健康診断の際に結ばされていた臓器提供の同意書で、締結は本人も分からない形で行われていた。

2021年、ウクライナでは臓器提供の意思を表示しなかった死者からも臓器を摘出できるよう、プロセスを簡略化する臓器移植法が採択されていた。

https://videon.img.ria.ru/Out/Flv/20240201/2024_01_02_FINALorgany_knz1fwz1.gio.mp4



<https://sputniknews.jp/20240201/17912381.html>

③ウクライナ軍総司令官、ゼレンスキー大統領の戦争方針をCNN寄稿で暗に批判か…その後解任報道(2024年2月2日)

ウクライナ軍制服組トップのワレリー・ザルジニー総司令官は、1日に公開された米CNNの寄稿で、侵略を続けるロシアに対抗するためには無人機や無人システムの整備充実など「新しい技術に基づく再軍備」が必要だと強調した。

ザルジニー氏は、兵力の規模や動員力など「人的資源ではロシアに優位性がある」と認めた上で、ウクライナは無人兵器やサイバー攻撃などを組み合わせ、武器や装備を節約しながらロシアに損害を与える必要があると強調した。ウクライナ側は、国民に不人気の兵士の追加動員を実現させない限り「兵力を増強できない」とも述べた。

ザルジニー氏は先月、ウォロディミル・ゼレンスキー大統領から総司令官の解任を伝えられたと報じられている。ザルジニー氏は昨年には、英エコノミスト誌への寄稿でゼレンスキー氏との意見の相違が顕在化した。CNNによると、寄稿は解任報道の前に書かれたといい、ゼレンスキー氏の戦争指導方針を暗に批判したとみられる。



<https://news.yahoo.co.jp/articles/fd88e6d0f2ee26d7a49f5dd9306a5294a4bba18b/images/000>

④孫崎享「ウクライナが露に勝つシナリオは消滅」「事実を報道しないのは日本のマスコミ」

—市民から見た世界@Shimin_World

分かりきっていた事ですが遂に日本の報道で記事になりましたね。

これまでウクライナ応援を散々煽ってきた日本メディアがどう報道転換していくか。

ウクライナ戦争「ロシア勝利」濃厚 欧米の力が低下、、、世界は `多極化時代、に

⑤「米議会が動かなければ、(弾薬が枯渇し)あと数週間でロシア軍が勝利する」

孫崎 享@magosaki_ukeru 4 時間

ウクライナが露に勝つシナリオは消滅。

米国の軍事支援は縮小。

米国の軍事支援に依存するウクライナは前線で劣勢。

こうした事実を WP など米国主要紙は記載。

事実を報道しないのは日本のマスコミ。

多くの日本国民はウクライナの勝利がない事を知っていない。

⑥ウクライナ戦争「ロシア勝利」濃厚 欧米の力が低下「米議会が動かなければ、あと数週間で…」世界は `多極化時代、に 1/31(水) 17:00 配信【矢野義昭「日本の自立」】

ウクライナ戦争は、「ロシア勝利」で終結する見通しが強まっている。その後の世界秩序は、欧米の力が相対的に低下し、多極化時代になるであろう。

ウクライナ軍では、70歳の老兵、14歳の少年兵が確認されているほどの兵員不足に陥っている。弾薬・装備も枯渇している。ジョー・バイデン米政権の軍事支援担当者は今月、「米議会が動かなければ、(弾薬が枯渇し)あと数週間でロシア軍が勝利する」と述べている。

ウクライナの敗北は、ウクライナを支援してきたNATO(北大西洋条約機構)、とりわけバイデン政権の敗北を意味する。

米国の一極覇権は終わった。米国は900万人とも言われる不法移民の激増に伴う、「社会の分断」と「経済の混乱」「治安悪化」に直面している。同様に「政治的不安定」にさらされている欧州の混乱も進むだろう。

他方で、戦勝国となるロシアは、国力を増大させて国際的な影響力を拡大するであろう。漁夫の利を得た中国や、グローバルサウスの筆頭に立ちロシアと親密な関係にあるインドなどの大陸国の台頭を招くだろう。

これまで親米的だった中東やアフリカの諸国の間でも、サウジのBRICS加盟にみられるように、欧米離れが進んでいる。

このような世界的な「バランス・オブ・パワーの変化」の背景には、「海洋国優位から大陸国優位へ」という、地政学的要因がある。

近代西欧文明は新大陸発見以来、他の文明世界を植民地化して覇権を維持してきた。その優位性の源泉は、大砲を搭載した大型艦船に象徴される「渡洋可能な軍事力」にあった。

西欧列強の覇権国は、スペイン・ポルトガルから、オランダ、英国、米国へと移り変わってきたが、海洋植民地帝国として覇権を維持してきた点では一貫している。

これら諸国は、まず海外の資源と労働力に富む地域に艦隊を送り込み、軍事的に征服して植民地化し、得た富

を艦隊の護衛の下に本国に送り返し、貿易で多額の富を得る。その富を、また海軍力に注ぎ込んで次の植民地開拓に投入するという手法で植民地帝国を築いてきた。

第二次世界大戦以降、世界的覇権国となったのが米国である。米ソ冷戦もソ連崩壊に終わり、1990年代には、世界中が米国型の自由で民主的な市場経済の国になり、新世界秩序ができると一部では予測された。

しかし、その予測は当たらず、「新たな多極化時代」が到来している。米国は今後内向きになっていくであろう。日本は米国依存から脱却し、自立しなければならない。

資源、エネルギー、食糧とも自給率が低く、少子化の進む海洋国家のわが日本が、どう自立し生き残るかがいま問われている。

<https://shorturl.at/dBRUV>

⑦ウクライナ軍の砲弾不足が深刻化、ロシアの3分の1以下に…米欧の追加支援滞り (ブルームバーグ、2024年2月1日)

米ブルームバーグ通信は1月31日、ロシアの侵略を受けているウクライナ軍が前線で使う砲弾量が1日2000発以下に減り、露軍の3分の1以下になっていると報じた。米国や欧州連合(EU)の追加支援が滞る中、ウクライナ軍の砲弾不足が深刻化している。

ウクライナのルステム・ウメロフ国防相が今週、EU各国に送った書簡で明らかにした。ウメロフ氏は戦線が1500キロメートルと長いことを指摘し、「多くの場合は、砲弾が多い側が勝つものだ」として、迅速な支援を訴えた。ウクライナ軍は月20万発の砲弾が必要になると訴えている。露軍は月40万発の規模で砲弾を確保しつつあるという。

一方、ロイター通信によると、EUのジョセップ・ボレル外交安全保障上級代表(外相)は1月31日、今年3月までにウクライナに供与できる砲弾は約50万発で、目標としていた100万発を達成できないと明らかにした。今年末には、年140万発を生産できる態勢が整う見通しという。



<https://news.yahoo.co.jp/articles/2ad0a3a7a4f3a759ef1e938d32d47c36539d650b/images/000>

⑧【密着取材】「これだけの成果のためにどれだけ犠牲が…」ウクライナ「反転攻勢」が失敗した舞台裏(Newsweek, 2024年2月1日)

昨年12月、クリスマスツリーが飾られた兵舎で分隊長のユージン(39)が筆者に声をかけた。突然

の呼びかけに「ドブレ(いいね)」と答え、泥だらけの軍用車に乗り込む。

ウクライナ東部ドネツク州バフムート地区のシベルスク市。ウォロディミル・ゼレンスキー大統領が対ロシアの反転攻勢における最重要地点としたバフムート方面軸の北部にある。昨年の本誌 8 月 1 日号で紹介したウクライナ軍の前線本部が 9 月に砲撃で破壊され、そのためシベルスクに駐留する部隊が、バフムート市の北側で展開される作戦を担っていた。

ミサイルが直撃し、穴だらけになった道を軍用車は高速で走る。向かうのはゼロ(ZERO)と呼ばれる戦闘地。軍人以外が近づくことは許されない場所だ。道の脇に焼け焦げた車が何台も放置されている。あらゆる建物が崩れ、骨組みがむき出しになっている。完全武装のユージンはマシンガンを構え、指示を出した。

「あそこに止まれ」

たどり着いたのはルハンスク州のビロホリウカという町だった。2022 年 7 月にロシア軍に占領されて以降、激しい攻防が続いてきた。数百メートル先で、ウクライナ軍のロケットが火を噴いて連射された。草むらの向こうに 155 ミリ榴弾砲を搭載した戦車が確認できる。フランス製カエサルの最新モデルのようだ。

敵陣からの距離は 1.5 キロ。民間人の存在を気にせず撃ち合いが行われる、まさにゼロ地帯だ。14 人の分隊を率いるユージンは戦況についてこう話す。「10 月には 300。足にロケットの破片が刺さった。9 月には 200。ロシアの戦車 2 台から攻撃を受けた。きのうの夜もすぐ近くにロケットが命中した」

300 は負傷、200 は戦死があったことを意味する隠語だ。部下のバーチャとグレゴリーに起きた被害をユージンは淡々と説明する。明日はわが身と、ここで一夜を明かした兵士たちがたばこに火を付けた。

昨年 6 月 4 日に始まった反転攻勢でウクライナ軍が挽回できた面積はごくわずか。逆に 8 月上旬、ロシア軍に 2 キロ押し返され、ビロホリウカの前線は止まったままだ。

この日の前日、12 月 4 日付の米ワシントン・ポストが「ウクライナの反攻失敗」と題する記事を公開した。

記事によると、6 月の大規模反転攻勢の開始に当たり、米英軍とウクライナ軍の将校は 8 回の作戦会議を行っていた。ザポリッジャのオリヒウにある前線基地からアゾフ海へ突破する攻撃に集中すべきだという米軍当局者。それに対し、ウクライナ軍の指導部は南東部 3 カ所での攻撃を主張した。その結果、戦力が分散し、膠着状態に陥ったという。

■砲撃を受けたレオパルト 2

反攻を開始してから 50 日が過ぎた 7 月 28 日、ウクライナ軍の先鋭部隊、第 47 独立機械化旅団はザポリッジャ州オリヒウの基地を出発した。アゾフ海への進撃を目指し、その第一目標としていた町ロボティネは攻略の途中だった。50 日間で押し返せた前線の距離は 8 キロ。アゾフ海まではまだ 90 キロもある。

ドイツ製の最新型戦車、レオパルト 2 などで編成された戦車部隊が並木に沿って進む。地元ザポリッジャで徴兵された大柄の兵士アンドリー(36)は、前を進む戦車との間隔を 50 メートルほどに保っていた。その時、前方の戦車が砲撃を受けたという。

「危ない！」と叫ぶや否や、今度は自分が乗っている戦車が被弾した。ロシア軍の攻撃ヘリによる銃撃が警戒されていたが、プロペラ音は聞こえなかった。偵察ドローンに見つかり、榴弾砲を撃ち込まれた可能性が高い。暗視装置の配備が遅れ、大型戦車の移動は夜間に、とのセオリーが徹底できなかつ

たのが悔やまれる。

徴兵を避け転居する若者も

アンドリーは大やけどを負った。背中と右手も損傷し、大がかりな手術を受けた。翌月、部隊はロボティネを奪還したものの、その後、前線の位置は変わっていない。アンドリーはリハビリを続けながらこう訴える。「わずか、これだけの成果を上げるために、どれだけの犠牲が出たことか。議論していても始まらない。すぐに兵員を補充すべきだ」

バフムート、オリヒウに続き、ウクライナ軍が第3の反撃地点として選んだのが、ベリカノボシルカからベルジャンシクへ向け南下する攻撃軸だった。

ここでは7月にスタロマイオルスケ、8月にウロジャイネを奪還して9キロほど前進した。ウクライナ軍はそのまま南進するかに見えたが、9月になって完全に停止してしまった。現場で何があったのか。

4つの海兵旅団と共に、ここで戦った部隊の1つが内務省傘下のアゾフ旅団だ。2014年、ドンバス紛争勃発時に義勇兵部隊としてマリウポリで創設された。志願兵としてアゾフ旅団に入隊したアレクサンドル・バレリエビッチ(47)は機関銃部隊の指揮官をしている。9月中旬、仲間の兵士との集合写真を前に、戦場での出来事について語り始めた。

「ある日、私たちの部隊は前進を始めた。すると敵は正確に迫撃砲を撃ち込んできた。どうやら待ち伏せされたようだ。その後、この兵士は地雷で吹き飛ばされた。こちらの若者は塹壕の中で待機していた。そこにロケットが撃ち込まれ死亡した。戦況は毎月、変化している」

写真の中の9人のうち3人が命を落とし、1人は片足を失い、1人は失明したという。戦車部隊が大きな被害を被ったことで発案された小規模編成の攻撃スタイル。中型戦車の後ろに歩兵を配置し、機関銃で攻撃する作戦は一部で成果が報告されている。しかし実際には、三重の防衛線で守りを固めた敵の餌食になることが多かったと、アレクサンドルは振り返る。

昨年4月の時点で、ドネツク州に派遣されたウクライナ兵は約10万。ロシア兵は18万~20万だとウクライナ軍の司令官は話していた。倍近い人員差を埋めずに臨んだ反転攻勢は、攻撃軸が分散したことで必然的に膠着を余儀なくされた。

ロシアのウラジーミル・プーチン大統領は12月14日、ウクライナに展開している兵力は62万人だと明かした。同1日に署名した大統領令では、ロシア軍の総員を17万人増の132万人とする目標を掲げている。

一方、英国国際戦略研究所の調べでは、開戦後にウクライナ軍の現役兵は69万人に増加した。死傷者数は公表されていないが、昨年11月にウクライナの市民団体が調査した結果によると、死者は3万人を超え、負傷兵は10万人に上るといふ。

人海戦術をもって失った兵力を本国から補充できるロシア軍。片やウクライナ軍は兵員の補充も、交代も困難な状況が2年近く続いている。そんななか、ゼレンスキー大統領は12月19日、ウクライナ軍が最大で50万人の追加動員を提案したと伝えた。それは可能なのだろうか。

バフムート方面で反転攻勢が始まった6月4日、ウクライナ国防省のハンナ・マリヤル次官(当時)はSNSで「計画は静寂を好む」というタイトルの動画を公開した。

戦闘服を着た兵士7人が1人ずつ画面に現れ、口の前で指を立てる。「開始の発表はない」の文字の後、2機の戦闘機が飛行するカットで終わる。国営通信社ウクリンフォルムはこの動画をウェブページに掲載し、「ウクライナ国防省、反転攻勢計画は発表されないと指摘」と報じた。

反転攻勢に世界の関心が集まっていた頃、テレビの報道番組で開始時期や戦術について議論する

ことを避けるよう、アナウンスされたこともあった。古今東西、戦争に箝口令は付き物だが、ウクライナ政府は死傷兵の数は公表しないと宣言するなど、その姿勢が徹底されている。

「必要なのは軍隊の改革だ」

しかし前線の兵士は唯一の楽しみとして、衛星通信を使って家族や友人と話したり、映像を送ったりしている。それらの情報を通じて、ウクライナ国民はむごたらしい戦場のありさまを見せつけられてきた。

開戦 1 年目、筆者が所属する人道支援団体では 4 人の若者が志願兵として前線に向かった。それが 2 年目には皆無になった。連日、数百人の死傷者が出たバフムートの戦いが影響したようだ。

ウクライナ中部からドンバス地方へ支援物資を運んでいる 30 代のトーラはこう話す。「いつかは軍に入って、自分も戦わなくてはいけないと感じている。でも今は無理だ。家族も許してくれない」

軍のリクルーターが通りや地下鉄で招集令状を手渡すという強引な勧誘も逆効果だった。徴兵を避けたい若者は、できるだけ自宅から外へ出ないようにしているという。

西部の都市で家族と暮らすある男性は去年の秋、東部の街へ「転居」した。「僕の町でも、外を歩いていたときに徴兵された友人がいる。だから前線に近い町に移ることにした。若者が少ないから誘われる可能性が低い、と聞いたので」

年が明け、ウクライナ政府は追加動員に関する法案を取り下げる事態に陥っている。招集令状を電子メールで送り付けるなどの手法が憲法違反に当たると指摘されたからだ。兵士不足の解消は見通せなくなった。

ウクライナ軍の現状を憂える声もある。ドネツク州北部にある第 15 連隊の歩兵、マキシム・アブラモフ(26)は「いま必要なのは軍隊の改革だ。訓練や選抜の方法を刷新する必要がある」と訴える。

マキシムは戦闘中にロシア軍の攻撃を受け、3 度負傷した。右肘は激しく損傷し、ドイツで手術を受けた。いま部隊に戻り、ルハンスク州クレミンナで任務に就いている。「戦争は数だけそろえて勝てるものではない」と彼は言う。7 割もの兵士が実戦を経験していない部隊もあるというウクライナ軍は、マキシムの提言に応えることができるだろうか。

膨れ上がる戦費を賄っていけるのかも大きな課題だ。兵士の月給について教えてくれたのはドネツク州リマンの部隊に所属するオレクシー(36)だ。「ウクライナ軍は戦闘地と非戦闘地で給与に差をつけている。私のように前線で戦う兵士は、月に 10 万フリブニャ(約 40 万円)。南東部以外で任務に就いている兵士はその 3 分の 1 ほどだ」

オデッサのショッピングモールでマネジャーをしていたときの月給は 3 万フリブニャ(12 万円)だったというオレクシー。国家統計局によると、昨年第 3 四半期の平均月収は 1 万 7937 フリブニャ(約 7 万円)だ。

月 10 万フリブニャについて、「命を懸けた仕事にしては安い」と、どの兵士も口をそろえる。しかし、国家破綻の危機にあえいできたウクライナにとって、平均月収の 5 倍以上に相当する給与を前線の兵士に払い続けるのは容易でない。ときどき耳にする給与の遅配が拡大すれば、厭戦ムードは一気に高まるだろう。

弓形に伸びる 1000 キロに及ぶ前線で、最大の激戦地がドネツク州にある。18 世紀、最初に入植したアウディイの名が由来の街、アウディーイウカだ。昨年 10 月、ウクライナ軍の反転攻勢が失速したのを機に、ロシア軍はここに猛攻撃を仕掛けた。

アウディーイウカが包囲寸前の危機に陥ったとき、呼び寄せられたのがザポリッジャ攻撃軸を主導していた第 47 独立機械化旅団だった。破壊を免れたレオパルト 2 のほとんどもここに移動させられ

た。

その後、同じく配置転換を求められたのが、開戦後に軍都となったオリヒウの野戦病院で医療補助をしていたユーリ・イワノビッチ(48)たち人道支援のメンバーだった。

勝利は1年後？ 4年後？

12月17日、ユーリが初めて訪れたアウディーイウカの野戦病院は負傷兵でいっぱいだった。手術室のベッドは5台。ブルーシートが足りなかったのか、壁の一部は黒いビニールで覆われている。痛みを耐えかねた兵士が、「ウーツ」という声を出す。心拍計のアラーム音が響く。11人の医師とボランティアは、それぞれの手術台で治療に集中している。

ピークを迎えたのはクリスマスイブの12月24日。砲撃を受けた戦車の中で火だるまになったのか、顔と頭がススと血まみれになった兵士が運ばれてきた。次は、左腕にロケットの破片が当たり、縦に3カ所裂けた状態の兵士。左足のアキレス腱に被弾し、裂け目から血が滴り落ちている兵士もいる。

ユーリたちは酸素マスクを兵士の口に当てたり、消毒液を染み込ませたガーゼを用意したりして、治療の援助をした。

今年1月、活動を終えたユーリからメールが届いた。「私たちは10日間、避難車両を運転し、傷ついた兵士を手術台に運び、全ての傷を洗い、医師をサポートした。仮眠できたのは数時間。それも手術台の上だった。これがアウディーイウカだ」

アゾフ旅団のアレクサンドルは今、バフムートの南にあるアンドリーウカで指揮を執っている。ウクライナ軍はこの周辺、約54平方キロの奪還には成功したものの、昨年秋以降、ロシア軍から繰り返し攻撃を受けている。

銃撃戦で倒れた仲間を救出するため、アレクサンドルはある道具を使うことにした。金属製のフックに長いロープを付けた鉤(かぎ)縄だ。「至近距離での銃撃戦の最中、腰を上げたら最後、やられてしまう。だからこれを負傷兵めがけて投げるんだ」

腕力を振り絞って手繰り寄せた仲間が息絶えていることもある。それでも、生きていてくれと願ってこれを投げる。

シベルスクの分隊長ユージンは前線で年を越した。チェコに避難中の妻や子供と会うことはできなかった。妻はインターネット電話で、「きつとうまくいくよ」と励ましてくれた。

最近、砲弾が不足してきたため、手作りしてしのぐこともある。マイナス14度のいてついた塹壕で戦う部下のことが気がかりだ。

「見てくれよ。開戦初日に出征した兵士が、まだここにいるんだ。みんな精神的にも肉体的にも疲れている。勝利が訪れるのは1年後？ それとも4年後？ 戦況を逆転させるには何らかの戦略が必要だ。戦闘機抜き攻撃などあり得ない」



<https://news.yahoo.co.jp/articles/7a468f874d85905bf79b3c74462f634a0745dec5/images/000>